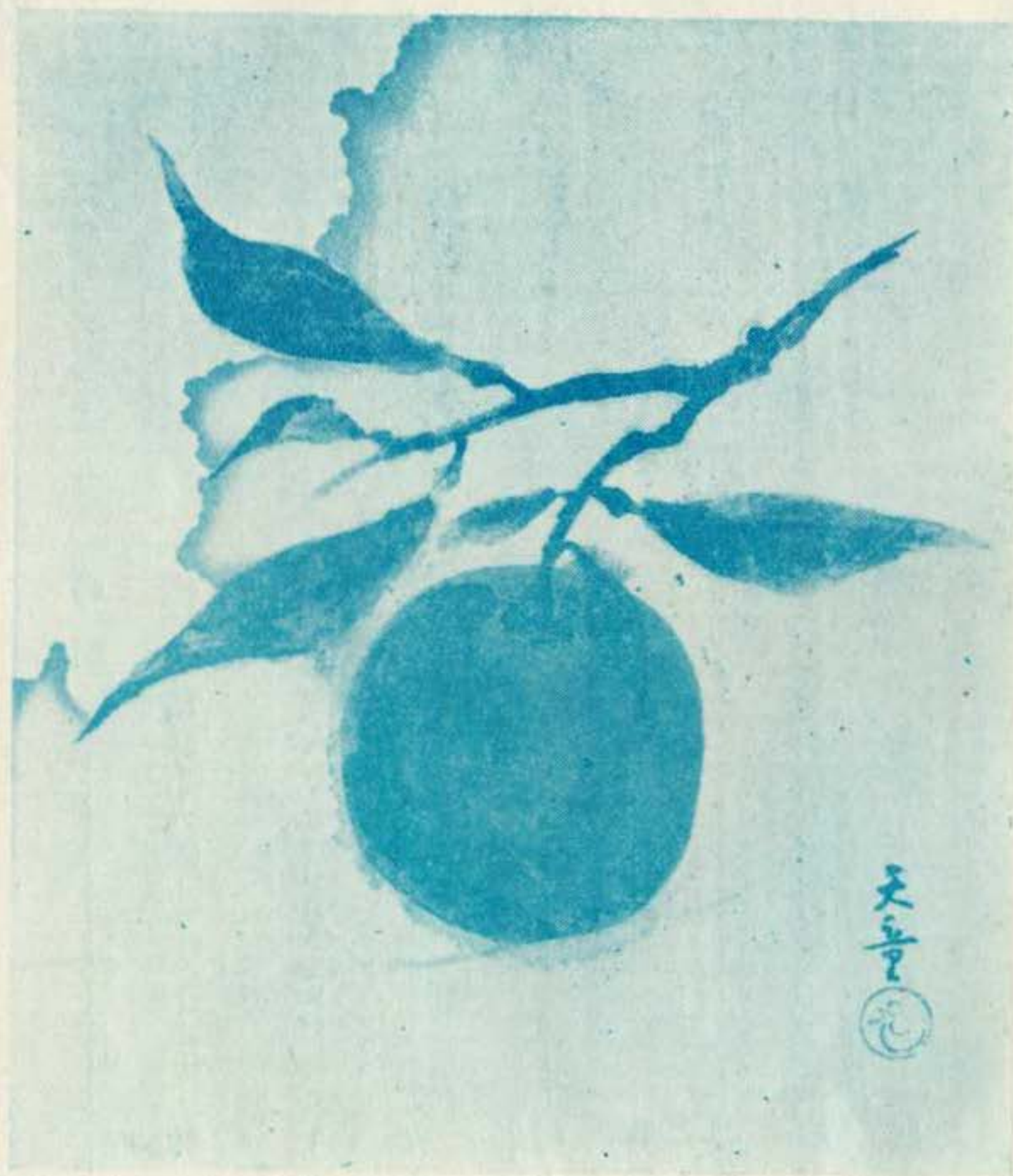


昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一冊發行）
昭和二十四年四月二十八日運輸省特別授受承認第三五二號
昭和三十三年五月二十五日印刷
昭和三十三年六月一日發行

第二十三卷

第六號

土 淨



六月號

御歌

阿彌陀佛と

いふよりほかは

津の國の

なにはのことも

あしかりぬべし

目次

卷頭言……………(1)

鑽仰 法然上人(二)……………林 隆碩(2)

病床の夫人とその家人え……………戸松學瑛(5)

苦難の丘に咲く花……………丸山幽水(7)

大藏經について……………村上博了(10)

妙好人 白石しな女……………首藤 莞爾(16)

滯印日記(五)……………春日井眞也(18)

大人の童話 芋掘り權助の話……………石川 忠正(21)

經典講話 阿彌陀經の理解(一)……………福富海岳(27)

佛教の歌ごえ

「あの高い山の上に寺を建てようと考えたのからして不思議だね。それが千年も昔の話なんだから驚くよ。無論、宗教の力には違いない。だが、今の日本人を見て御覽。そんな雄大な計畫はとんぼ返りしても出て来ない。それをまだ世の中も開けない千年も昔に、今から考えたらお伽話めいて見えるくらいに馬鹿でかい人間の夢を、平気で實現して見せたんだから驚くのだ。それこそトラックもケェブルもない時代に、あの山の上に平地にもなかなか見られない大きな寺を建ててしまつた。いつか行つて御覽。びつくりするくらい大きな寺だ」

大佛次郎の近來の名作、英語にもほん譯された小説「歸郷」の中の一節である。さすがは現代日本の知性を代表する一人として、その透徹した文化觀には敬服する。今日でも、東洋一のダムを作り、壯麗なデパートを續々と建てて行く日本人である。決して、今日の日本人は萎縮していない。しかしそれは本當の姿だろうか。外見だけではないだろうか。いつてみるならば、それはみんな商賣のため、儲けるため、または目前の利益のためでないものは一つもない。すぐに役立つもののためには、今日の日本人はむしろ昔の人の考え及ばぬ程に、とほうもないことをする。しかし亡き先祖の供養のために、或は幽遠なる佛道成就のために、心の糧になるようなものを、百年五百年千年の後の世にまで残こそうという、純粹な氣持ちで努力する人が一體何人いることであらう。

あんまり利巧にならないこと。あんまり賢くならないこと。日本を日本だけにみることをやめて、もう少し大きい目と心とを養いたいものである。(N・T)

鑽仰 法然上人 (二)

林 隆 碩

法然上人と叡空上人

法然上人の御師には、菩提山の觀覺、持寶房源光、肥後の皇圓、法相の藏俊、華嚴の慶雅、三輪の寛雅、眞言の相模阿闍梨重宴、圓後の迎接房等の數人あります。なれども本師と仰がれたのは黒谷の慈眼房叡空上人であります。されば此本師と法然上人の相互關係を知ることとは、法然上人を知る一つの道であります。由つて傳文の上に於いて、兩師の交渉を見たいとおもふ。

(一)久安六年九月十二日、生年十八歳にして、西塔黒谷の慈眼房叡空の廬に入りぬ、幼稚の昔より成人の今に至るまで、父の遺言わすれがたくして、とこしなへに隱遁の心ふかきよしをのべ給ふに、少年にしてはやく出離の心をおこせり、まことに、法然道理のひじりなりと隨喜して、法然房と號し、實名は源光の上の字と、叡空の下の子をとりて源空とぞつけられける。

(二)傳本四の戒體論に、立破再三に及び、問答多時を移す時、慈眼房立腹して、木枕をもて打たれければ、上人、師の前を立たれにけり、慈眼房、思惟すること數尅の後、上人の部屋に來臨して、御房の申さるる旨、天台大師の本意圓頓至極なりけりとぞ申されける。

(三)傳本六、往生之業に、觀稱憂劣論のとき、慈眼房は觀は勝れ稱は劣、大師は稱は勝れ觀は劣るの主張であつた。本師が先師良忍上人も觀勝稱劣であつたと申された時、良忍上人も先にこそ生れたれ云々と返答なされた時、慈眼房立腹し給ひければ、善導和尚も、上來雖說定散兩門之益と釋し給へり、稱名勝れたりといふこと明なり、聖教をばよく御覽し給はでと申さる、

(四)傳本十三、建仁二年三月十六日、上人語りてのたまはく、慈眼房は授戒の師範なるうへ、同宿して衣食の二事一向にこの聖の扶持なりき、然れども法門をことごとく習ひたることはなし、法門の範は、火水の如く相違して、つね

に論談せしなり、この聖と源空とは、南北に房をならべて住したりき、あるとき聖の居たまへる坊の前をすぐるに、聖見たまいて、あの房やとよび給へば、とまりて、縁に居て、候と申に、大乘の實智を起さで、淨土に往生してんやとの給ふに、往生し候ひなんと答申すとき、なにさは見えたるぞとのたまふ間、往生要集に見えて候と申に、往生要集の中をも見給たるぞとの給間、いざたれか中を見ざるやらんと申たれば、聖腹立て、枕をもて、投打にうちにうち給へばやはらにげて我房の方へまかりたれば、をふておはして、はききの柄をもて肩をうちなどし給ひき。

又後に文をもておはして、これはいかにいふことばのたまふ、心の中に、無益なり、事の出てくれば、いまは物申さじと誓をおこして、いざいかゞ候らんと申したれば、又腹立て、それらが様なる人を同宿したるは、か様のことをもいひ合せん料にてこそあれとの給ふ。

かようにして、つねにいさかひはせしかども、最後には覺悟房と申す聖に二字をかくせて、かへりて弟子と成て、坊舎聖教のゆづり文をも、もとは讓渡と書れたりしをとり返して、進上とかきなをしてたびて、生々世々にたがひに師弟とならん料に申そとの給き。

〔五〕問師の傳戒論に、叡空の門人その人多しと雖も、智道兼備の人は、方に源空に當る、叡空念言すらく、我が戒法の嫡々、源空その人々あたると雖も、彼、既に他宗の志あ

り、離山の望あり、彼を除いて、己外に亦その器なし、恨むらくは、南岳十七代の傳戒、露地七代の嫡法、我に至つて將に絶えんとするか云云、後に源空にゆづるの瑞夢を感じ得して、傳衣、傳戒し玉ふ、故に南岳十七代の袈裟、妙樂十二門戒儀等悉く叡空上人より得たまふ。

已上の五件の中、第一は入室當時であるから師資の一致こそあれ、相違のあるべき筈はないからこれは問題でない、後の四件では、所謂、師資の水火の相違を見るのである、文上の傳へられているのは僅かに四件であるが、其の日夜の自由研究の進路上に兩師の相違は頗る多方面に數起されてのものであらふ。〔一〕戒體論、〔二〕觀稱論、〔三〕大乘實智起不論、〔四〕傳衣論の等の素材に依つて叡空上人の爲人を推則すると左のようである。

第一、老骨ながら頗る研究上の勇者であつて老いてます／＼盛といふべく、吾人の以て範とすべきで、元祖上人が木曾冠者亂入の一日だけ聖教を繙かなつた此の好學的態度は、一つは先天的のものであつたであらふか、他の一は御師の吃々として倦まざる忠學的の影響にもあるものとせざるを得ないものがあります。まことに此師にして此資ありと云ふべきである。

第二は、研究の精神は哲學的研眞でなくて、宗教的研修であつたことは、特に留意せねばならぬ、其の論證の題目が戒及往生についての事であることが何よりの證であらう。

第三、恩師の性格は、單純率直天真爛漫であつた、怒りやすく、又直りやすき性質であつたらしい、問題毎に、立腹、投枕のことがあり、又それを率直に懺悔して居られる點が、師の人間味を窺ふ點に於いて興味あるところであるとおもふ。

第四、御師は傳燈の忠僕を以て自任していられた、先師良忍上人云云で充分にそれを知ることができる。且つ又傳戒論の所傳の如く戒統を傳ふにあたつて源空こそ其の適人であるが、他宗、離山の意志がほの見えていたので嫌厭されたのも傳燈尊重論者としては蓋し當然のこと、あくまで叡山に戒の正統が留るべきとの堅い信念に住せられていたのである、尤の次第と申すべきです。

第一の好學的第二の實踐的の二面は師弟相同じであるが第三の單純率直性に於いては同じからざるものがある、元祖が立腹されたといふことは八十年の生涯一度も見ることができぬ。阿波介の念佛と源空の念佛と同異如何の問題のとき弟子の答に對して立腹されたこと御流罪のときにたとい死刑に所せられても此事實はすはあるべからずの二回だけか怒であるように見えますが、これは怒り氣に見ゆるのであつて、眞の怒りではないのである。彌陀の慈光にてらされた眞の念佛行者に怒はあり得ないからである。

第四の傳燈に對する態度、これこそ正しく水火の相違である。戒體論においても天台大師の一本のみを取つて他本

を取らず、勸稱論においても善導のみを取つて餘師をとらず、先師良忍上人の説すらとらないましてや御師の説においてをやである。大乘の實智論でも、慧心僧都すら取らずましてやそれ已外の師においてをやである。

前來を要約すると、師資の相違は、性格上の相違と、他は傳統に對する態度の相違から、ついに水火の論戰が行はれたと申すべきであります。されど師資の交情から云へば他に例を見ないほどの水魚の交であつた。この水火の相違と水魚の交情は、相反していて而かも相反せず、相反せずして相反す、二に似て二にあらず、一に似て一にあらず相即相入して師弟不離一體のものであつた。佛道の修行も研鑽もすべからく斯くあるべきである、淨土教の史上師弟道の模範とすべきである。

傳本四に

佛法に私なきこと、あはれにはんべり、かゝりければ、上人をもて軌範として、師返りて弟子となり玉ひにけり傳本十三卷に

生々世々に互に師弟とならん料に申そとの給き生々世々、互に師弟とならん、とはなんと云ふうるわしき信情でせう、かくの如き甚深の妙旨、しづかに翫味すべきである。

續後撰集に 題しらす 叡空

何ゆへか 宿をあくがれ 出にけん

さし入る月の 光をも見て

病床の夫人とその家人え

戸 松 學 瑛

Mさん、奥さんの御病氣、その後如何ですか。八年も寝たきりの御病人の看護は、並大抵ではありませんまい。深くお察しいたします。それでも昨今は、いろは四十八の文字板を指してお話をしていらつしやるとのこと、御不自由ながら意志が通じて結構ですね。からだの自由がきかなくなるとだれでも、チレッタさが加わつて悪いとは知りながら無理難題を言つて、看病人を困らせるものです。それを逆らわず、あなたは病人が本當に可愛相だとおつしやつて、おしもの世話までして上げるとのお話を承り、本當に頭が下がります。奥さんも、さぞかし感泣して居らるることと存じます。ついては私の過去の経験から病中心づいた一、二を御参考までに申し上げます。

奥さんえ

『病は善知識なり』と古徳は述懐して居られます。申すまでもなく善知識とは先生であると言うことで、お互に病

氣になつて健康の有り難さを知り、不攝生の愚を悔いる等々、いろいろと反省し慚愧する機会を與えられるものです。ところがお互の不覺からそれを反對にとつたり、氣づかなかつたりして、徒らに不自由を啣ち、果ては自暴自棄に陥り、自分もこまり他をもこまらせる場合が多いようです。一寸言いくいことですがこゝで反省一番、心氣一轉禍を轉じて仕合せとなす心がけこそ大切でありましょう。『病は良藥』なりとの諺もあります。泣いて暮すも、笑つて暮すも一日は一日、萬事萬端感謝の氣持をもつて療養する病人の修養が望ましい。病氣は氣からとも申すこともありますゆえ、取り越し苦勞することは禁物です。死生命ありで、よしんば死んでも致し方のない自分が、こうやつて今日生きて居るのは、有りがたい命あつての物種子だから喜ばずには居られないと合掌する、感謝する。娑婆世界とはカン忍の世界だ『淨土にあらざれば心にかなら處なく、ボサツにあらざれば心にしたがる人なし』と古

人も仰せられた。それなのに自分は、かく手あつい世話を
して貰うのは、すまぬ、有りがたいと喜べば看病人も苦勞
を忘れて、いよいよ心盡しの面倒を見てくれる、思えば思
はるるのたとえ、自他共にプラスになるばかり、日々是好
日で心も明るくなり、和氣自らただよい陽氣が充ちてくる
それこそ病氣何者ぞ、鬼神何するものぞと言う元氣か湧い
てまいりましょう。くれぐれも病氣を反省の善知識として
味つて頂きたいものです。

看病の方々え

良藥は口ににがし、反省も感謝もよろしいが兎角出來な
い相談になり易い恐れがあります。そこで看病人は慈愛の
心を振り起し氣に障らぬよう、和顔をもつてにこやかに、
愛語を以て親切に、恰も一體の佛さまを作る心もちで病人
に接し、よく納得のいくよう致したいものです。藥、食、
諸手當……それからそれと大變ではありましょう。お釋迦
さまもこの邊をお察し下され看病は八福田（八ぶくでん）
八種の善事）の中、第一等勝れて居ると仰せられ、その功
徳を稱讃して居られます。看病人の御苦勞深く察せられま
す。

しかし、病人ともなれば、だれでも氣を腐らせて、つま
らぬ妄想を起し、忘念をかき立て、あれやこれやと迷い易
くなるものです。適正な精神療法ならば結構ですが、溺るる

者はワラをもつかむで、加持祈禱に凝つたり、怪しげな迷
信に陥つて取り返えしのつかぬことになる人が少なくはあ
りません。當今新興宗教の弊害の叫ばれるのも想像するに
難くはありません。

神さまを又とりかえて願をかけ、警戒いたしたいもので
す。

幸にも、わが淨土宗祖法然上人は、迷い易いこれ等の病
人を御指導あつて

宿業限りありて受くべからん病は如何なる諸の神に祈る
とも、それによるまじきなり。祈るによりて病もやみ、
命ものぶることあらば、誰れかは一人として病み死ぬる
人あらん

と誠められ又一方にはお佛の功德を高調して

佛の御力は念佛を信するものをば、轉重輕受とて、宿業
限りありて重く受くべき病を、かろく受けさせ給ふ、況
や非業をはらひ給はんこと、ましまさざらんや

とお念佛をおすすめなされました。『信は力なり』信仰ある
もの、念佛するものが絶大の力を與えられ、現世も佛ボサ
ツ方の護念を蒙ることは多くの經釋に示されて居ります。

どうか信仰の方面は佛さまにおまかせいたし親船に乗つ
た心境で御家庭の皆さんも、奥さんに協力し、心安くおす
ごしの程念願して止みません。

苦難の丘に咲く花

丸山 幽水

△▽

釋尊は、この三界は火宅なり、衆苦充滿して甚だ怖畏すべしと仰せられた。この世の中に、われわれ生存している限り、大なり小なり、この苦という現象から全く免かれるということとは出来ない。

佛説に於ては、まづ生老病死というものを人生の代表的な苦の部門にあげているが、實際の世間的な言葉をかりていえば、まづ生活の苦勞、人生の苦難、仕事の苦役、技術の苦心などと、苦のつくものが相當に多いのである。

いま、われわれは煩惱の凡夫であるかぎり、全く、この苦を脱却することは至難であるが、これを和らげ又は、佛説の轉重輕苦の方法によつて、一應の處理をしてゆくのが人間としての心構えであろう。

苦といい、煩惱といい、無明といい、地獄といい、何れ

も暗い系列に屬するものであるが、この反對に、光明の系列に屬するものとしては、極樂、眞如、菩提などである。

先年、和歌山刑務所傳道の折、自分は佛説地獄極樂の定義を心理學的に解明を試みたのであるが、その當時の用語を記してみると大體、左のようであつた。

すなわち、佛説でいう「安養の世界」とか、極樂淨土とか、理想境などということは、心理的にいえば「そのままに在つて欲しい時間の連續」ということになる。そして又、苦の状態としては、カントの精神作用三分類の感情のうち憤怒などと共に、整わざる感情の堆積であると前提したのであつた。

大體、受刑者たちは、苦難と幸福というような問題には相當、敏感であつて常に、關心をもつて聽くものである。

そこで苦という問題を論ずる上には、必ず樂という對立的な問題も含まれるので、もちろん、これにも論及したの

である。

△二△

大體、人間苦の問題については、既に觀音經に於ても拔苦與樂と稱して、この輕減につとめて居り、佛說でも煩惱即菩提と稱して、苦樂一味であることを説いているのであるが、世間の大眾は、なかなか素直に、この眞理を諒解せず、樂とか、菩提とか、安穩とかの一面のみをとりたがつてゐるのである。試みに、中國の古典をひもといて見ると、「樂處樂は眞の樂にあらず、苦中に苦を得來つて、わずかに心體の眞義を見る」とある。

すなわち、安樂な境遇にある楽しみは、眞の樂ではない苦中に見出した樂こそ眞の樂であるというのである。まことに煩惱や苦難というものは、安樂や菩提と共に、一枚の紙の表裏のようなものであり、また、あざなえる繩のようなのである。

つまり、われわれは、その好む片方だけをとるわけにゆかないので、必ず表には裏というものがついて廻り、繩のたとえにしても、一本の繩を二つに分けるといふことは出來ないのである。

佛說に於ては、この關係を水波不二とよんで、波と水の

如く、波の本性を離れて水なく、水の本性を離れて波のない關係にたとえている。それならば、こうした苦の現象に對して、われわれは如何に對處してゆくべきかの問題に蓬着するのであるが、あくまで佛說の理法に隨順して、すみやかに心を柔軟ならしめ、來るものを恐れず、觸れる縁をうれえずの態度でゆくべきであらう。

良寛法師も、

「因縁時節には藥を與うるもよく、また死ぬるもよろしく候」

と、いわれた。

つまり、われわれ人間として、永遠の生に歸命するとならば、死ぬことさえも意義ありと説かれたのである。まことに、人生もろもろの苦難にあふことは、本質的に見れば決して不幸ではないと思う。むしろ、不幸のないことが不幸であるということも云い得られると思う。苦難や、煩惱こそこれを縁として人生の眞實の味わいが體得され、佛縁を催す一つの機會となるのである。

△三△

矢張り人生は、相對的な存在があるが故に、その片方のものが浮上つてくるのであらう。すなわち世があつて樂のよいことが判り、鹽があつて砂糖の甘さが判るようなもの

である。また、夜があつて晝の有難味が感じられ、死というものがあつてこそ今生が、なつかしまれるようなものである。

大正の文豪、厨川白村氏は、

「苦悶の象徴として藝術があり、苦悶するところに生命あり」

と、いわれたが、まことに意味のある言葉である。苦悶あつてこそ、偉大な藝術も生れ、傑出した人間が出来上るのである。

昔、文珠が維摩に向つて、

「それよく非道苦難にもまるべし。恰も高原に蓮華生ぜず、陰濕の汚泥に生ずるが如し。また煩惱の苦海に入らざれば則ち一切智の寶を得る能はず」と、答えたのである。

まさに、煩惱なくして佛法は生じないように、人生の苦難なくして安樂はない。人間、もろもろの苦は、すなおに随順して受けてゆくとともに、佛の救いがあり、やがて苦難の丘にこそ、安穩の花が咲くのである。

×

×

×

手 向 草

— 莊園寺松山僧正追悼 —

澤 田 學 遵

今日はしも四十九日忌よどみなく時は流れて止まずありけり

朝けより霧雨けぶり山麓のバスは込みゐて坐席あらなく

門入ればみ堂の廣庭名も知らぬ色とりどりの花咲きてあり

これの花めでたし人もうつし世に居まさずなりて四十九日忌

うつせみのうつゝの身はも安養の淨土にありて安けからまし

うつせみの世と知りけらし魂きはるみ姿のまへわが目しばたく

大藏經について

——増上寺三大藏を中心にして——

村 上 博 了

一、名 稱

神武以來の好景氣と言はれる昨今、表題の大藏の名は、實に之に呼應せるかの如く、全く以て氣持が朗らかとなる。

併しここに云う大藏とは、決して物量の問題ではない。無上甚深微妙法についてである。人生の安息所、眞理への探究、無上の生き甲斐を啓示する心の寶、佛法についてである。

物量が多い程、結構なことではない、併し山なす程あつても、精神が之に伴はなければ、何らの益もない、世に云う猫に小判、馬の耳に念佛の類となり、寧ろ百害が生れるかも知れない。

物を生かす心の働き、無より造り出す創造力こそ、人生を生かす佛法であり佛寶である。従つて佛法は、人になく

てはならぬもの、その人の價值を限りなく向上發展せしめるものである。

佛法は、釋尊一代の教示を云う、滅後その一切の教戒を集録し、經律論の三藏に整頓されたものを經典と云い、そのすべてを一切經又は大藏經と呼ばれている。

寺院は、七堂伽藍が整備されて、完全なものと云はれる。その一に經藏があり、大藏經は之に收められている。

二、經典將來

將來と云う言葉は近來は未來と同意と解される。併しここに云う將來は、請來と同意で傳來と云う意味であり、經典傳來を指すのである。

支那に「三才圖會」と云う書物があつて、それによると日本人として、僧形の人を出している。日本人は皆僧形なりと誤解される位である。何故かかる説明をしたものであ

ろうか。云うまでもなく、日本の高僧達が支那を佛教の聖地として非常な苦心をして渡海し、支那各地を遍歴しては支那人の注目をひいたからに外ならない、その年代は隋唐五代元明清時代の長きに及んでいたからであろう。

所謂入唐入宋僧の多くは、求法の爲であつて、明哲について傳承することも大事なことの一つであつたろうけれども、經典を閲覽研究することが、その重要な目的の一つであつた。

國內に佛教が、あらゆる文化と共に滲透するに従つて、大藏經典を請來し寺院の經藏に保存して、自然に人生の眞理探究の便とする風習が出来た。各寺院に於ては書寫されたり轉讀されたり、印行されるようになったのである、大藏將來の始は、東大寺の齋然が寛和二年大藏經五千四十八卷持ち歸つたことであり、刊行の始見は、國太曆に北朝光明天皇康永四年三月二十日藤原忠朝藏經開版と傳えられることである。

三、増上寺三大藏

その一

萬德所歸の念佛弘通の大本山、東京芝に増上寺がある。

淨土宗元祖法然上人圓光大師の正しい法統を傳承せる隨一の故跡寺院であり、専修念佛の根本大道場である。寛永二十年になれる「東めぐり」に、この世ながらの極樂淨土

とたたえられ、慶長三年建立せられた二十五間四面疊數七百三十二枚、大柱六十六本、向拜四本柱八間三間、疊の上まで十九間の堂々たる大殿は、明治六年十二月三十一日夜狂人の放火で炎上、ついで再建された十八間四面の大殿も亦明治四十二年四月一日に護國殿飛雲閣と共に炎上、又大正昭和の木造日本代表建造物と云はれた二十五間四面の再建大殿は、昭和二十年五月南北兩御靈屋と共に戦災炎上、現在は十一間十三間の本堂であつて、昔日を物語る佛は見當らない。

併し三門が残つている、詳しくは三解脱門と云い、東京都最古の木造大建造物、永井荷風先生の言葉を待つまでもなく、佛國パリの凱旋門に比適する豪莊華麗な大三門である。又嘗て國寶であつた關東隨一四千貫の大梵鐘並に、大經藏が現存する、經藏の中央部に大輪藏があり宋版大藏經を収めている、輪藏は中央部に大柱あり、之を中心として六字の名號に擬して六角形に末廣にひろがつていて、數人で之を廻すことが出来る様になつている。

斯界の權威田邊工學博士や文部省並に東京都の文化財委員達は、規模の大きさ、美麗な造り方に於て、正に慶長時代の代表作の逸品なりと折紙をつけている。

その二

貝塚増上寺が、幕府の江戸城擴張工事の爲め、その境内を沒收され、慶長三年八月替地として、現在の芝公園地二

十五萬坪が渡されたのである。

大經藏は、慶長十年に、當時の大殿に向つて左側、大殿寄りの土地（現在の大書院東端の敷地）に、銅葺白壁造り四方開きに建立されたのであつた。

増上寺五十四世念海（倫譽）大僧正の時代寛政十二年六月將軍家齊のすすめに従つて、現存地に迁すこととなり、享和二年三月竣工同月十日大殿三門の修繕と共に、落慶供養法會が嚴修され、火防に對して萬全の豫防處置がとられたのであつた。

その三

増上寺經藏には、第一宋本、第二元本、第三高麗本と三藏が保存され、國寶となつてゐる天下の稀觀本である。尙明藏も保存されている。四本揃つてゐる所は他山にその比を見ない。

イ、宋 本

五千七百十四卷、折本で前にあげた大輪藏に收められてゐる。南宋理宗の嘉熙三年版であつて、支那湖州路思溪法寶寺で彫刻された貴重な經典である。後宇多天皇の建治元年に、近江菅山寺僧專曉入宋將來、菅山寺に保存されていたが、慶長十八年に、台命によつて、安藤帶刀重信と本多上野介正純が使者となり、彦坂九兵衛代官として、三緣山増上寺の經藏に納められたものである。幕府では右の代償として御朱印五十石と境内山林を寄附している。

ロ、元 本

五千三百九十七卷あり、宋本同様に折本である。至元十四年から二十七年に至つて、開版されたもので、杭州路南山大普寧寺の經藏にあつたのであるが、日本に請來されて伊豆國修禪寺の藏本であつた。慶長十五年台命によつて、増上寺に納められたものである。幕府では右の代償として御朱印四十石を贈つてゐる。

ハ、鮮 本

高麗本で六千四百六十七卷、綴本である。

後土御門天皇の文明年中、大和國忍辱山圓成寺僧榮弘が將來して同寺に保存されていたが、慶長十四年三月十四日台命によつて、南都一乘院宮の指麾を以蓮花院遍照院を惣代僧として、増上寺に納められた、幕府は代償として百五十石の御朱印を贈つてゐる。

攝門は、三緣山志に於て、

此朝鮮本は、京都建仁寺の本と、當山計にて、他國他寺に類なし

と、傳えているけれども、法然上人由跡四國讚岐佛生山法然寺にも同寺什本としてあり、増上寺本の見本は、之を以て補充している。建仁寺本は幕末に炎上殘本少々を残すのみである。大藏經の卷數については、勅修御傳四十五卷にも、

唐土より日本國に渡る一切經は、五千餘卷あり、その中

に双卷無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經、之を淨土の三部經となづけて、往生極樂のやうを、ときたまへる經なり。

としている。

王朝鎌倉兩時代已に五千有餘卷、前にあげた増上寺三大藏の卷數とを比較すれば、自ら明らかなものがある。

四、大藏經の地位と信仰

宮中の御齋會は、毎年正月の始に、大極殿に於て、金光明最勝王經を開くことによつて始められている、又聖德太子以來佛法僧の三寶が、あらゆる生活の中に融合しているから、吾人の生活は佛教を度外視しては成立しないようになつてゐる、例へば手紙に用いる「御安心下さい」の安心は、御心配ないように或は安堵下さいの意味ではあるが、信仰上の「御安心」からきている。彼岸・お盆の言葉は、佛教上の要語であるが、その儘生活の中にとけ込んで、國語として用いられている如きである。従つて、佛教は生活様式の母胎となつていて、宛も大地のように無くてはならぬものとなつてゐる。その中心は大藏經又は一切經に發している。

五、大藏經の功德

その一

法然上人が、承元元年十二月八日太政官符を以て勅免され給うて、四國より攝津の國へ渡り押邊に逗留せられたのである。ついで勝尾寺に迎えられ、同寺西の谷に草庵を結んで住まわれた、同寺は大變に荒廢し、住侶の法服もいたんで見る影もない様子であつた、法然上人は法服十五具を施入、且つは一切經もない由を聞かれて、上人所持の一切經を施入せられ、開題供養に當り、京洛より聖覺法印を呼び說法をせしめられたのである。ここに注意せられ度いのは、勝尾寺は淨土宗ではないのに、かゝる厚意を寄せられたことは、上人の御心に於ては、念佛の弘通が主であつて宗派の如きは云はゞ眼中になかつたのではなからうか、人あり、承安五年淨土開宗せられても尙叡山沙門とする（元久元年十一月起請文）をあげつらう如き小心よく／＼たる小さな御意ではなかつたと拜される。

上人の御生活は、上人に于する諸傳に見られるように、決して裕福なものでは無かつた、恒に粗末な簡易生活に終始せられている。その苦しい生活の中から、一切經を求められたことは並々ならぬ御苦心の結晶と思はれる。その一切經を勝尾寺に施入していただける宏大な御心こそ大藏經を生かして貰いたいとする佛陀如來の御心そのものであらう。

その二

増上寺三大藏緣起に

夫佛出世也 度生而已略

藏經所在 卽佛之出世也

とある。

經典のある處、佛在すとする信仰である。

經典を生かすものは人である。その佛子を育成するものは經典である。増上寺七十世福田行誠（立譽）上人は、學問の用心（行誠全集收）に於て、

元祖法然上人は、大藏經を五度まで通覽ありしことなれば、全體を云ふと、一度は大藏經を通讀せざるものは、坊主仲間に入らぬほどのことなり。若き人達は、此大藏經を生涯に一度讀むと極めるべし

と、説いていられる。法然上人五度まで大藏經を讀まれたことは、勅修御傳卷五と六に見えるところである。

學問の用心は、千古に生きる金言と稱すべきであろう、寶の山に這入つて寶を見て、腹中のものとしなくてはいけない、宜しく之を活用する、生かして欲しいものである。

その三

特に増上寺國寶三大藏の中で、福田行誠上人は高麗本について、

大藏經は、宋より元に至るまでの間凡そ二十有餘あり。

但し高麗本が第一に宜し、明本は粗なり

とせられている。

又三緣山三大藏緣起には、

宋の至道元年・高麗國王・國中の名僧守其他數十員に勅して、流本二藏・宋官版本・契丹版を參照校合、之を海内の正本とす。

この本渡來甚だ稀なり、たま／＼我が増上寺に在りとして、其の最良のものであることを説示されている、前文にあげたように大きな綴本であり、活字も美事で、老人にも大變に見易い之を底本として宋版元版明版を照合して出來たものが、世に縮刷大藏經又は縮藏と愛稱され愛用されているのである。

六、結 び

明治維新の神佛分離令は、從來幕府の神道壓迫の反ばつと、徳川幕府に對するにくしみとは、佛教各寺院に對する廢佛となり、毀釋となり、各寺院は荒廢の極に至つたのである。ついで神社も亦荒廢するもの尠くなかつたので、神佛混淆となり、庶民精神文化の大苦難の秋であつた。「心の古さと」今いづこ、探ぬるに由なく、心のよりどころを失つた者ほど、あわれなものはない。

この眞只中にあつて、社會正義と道義を再建し、社會秩序を立て、世界の各國民に互して行かなければならない、従つて國民生活の中核である佛教を復興し、精神の安定を圖らなければならなかつた、その具體策の一つとしては、大藏經を普及せしめ、數多の人々に讀ましめるにありと

——玄海に薰り咲く白蓮——

白石しな女

首 藤 莞 爾

九州の篤信地長崎縣下を巡錫の砌り、はからずも一人の妙好人に接することが出来た。それはオランダ貿易の發祥地として有名な平戸島より、更らに海上四里の北方に點在する玄海灘の一孤島、大島村字的山（あづち）西光寺檀徒、白石しな女（當時六拾歳）である。

いづこも同じ孤島の信者は頗る人なつこい。折柄きびなご漁で賑ふ秋晴れの波止場を、一望に見下す高臺の同寺の布教師部屋を連日訪れて四方山の珍らしい海の物語りで、旅の無聊を慰めて呉れる數多の信者のなかに、このしな女も交つてゐた。

或る日彼の女は膝をすゝめながら一綴りの自作の道詠集を示しつつ、己が奇しき一生と、念佛の法悦に生きつゝある現在の心境を、素朴な島言葉で訥々と語りはじめた。

それによると彼の女は、島でも相當の魚仲買を營んでゐた夫に中年にして死別し、あまつさえ只一人の十八歳の息子まで終戦の年の二月病氣で失ひ、爾來孤獨の老いの身を細々と自活してゐるとか。然し現在の彼の女には、往々轆轤不遇の女性にあり勝ちな人生呪詛の暗い面はみじんも見られず、悟達の域に到達した、溫厚そのもの老婆である。

先づ手渡されたその道詠手記に目を通したが、全篇がいわゆる金釘流の平假名墨書で埋められ、ほとんどが彼の女の自作自詠であると云ふ。元より、離島の學識なき老婆の自詠であり、手蹟である故その文意構想、語勢筆蹟等が稚拙であらう事は豫期してゐたが、意外にも、一讀後その一詠一語にもられた率直な彼の女の信仰と、品格ある詩情には全く感銘させられた。これがどうして一介の孤島の老婆の自詠と思へやうか。あたかもそれは聖僧の作か、將又名ある

女流歌人の作にあらずやとまで疑はれる程で、再讀頭のさがる思ひがした。

自分は彼の女の乞ひを容れて、讀み易きよう假名を本字に直した外、原文の誤字、脱字と甚しき文法上の誤り等を若干訂正補筆はしたが——、以下これを抄出してこの好個の妙好人を紹介したい。

———

手記には七五調の美事な序文がついてゐる。

この世に生をうけてより、死する日までの人として、歩み來りし我が過去を、振り返り見るあじきなさ。

慾もなければ徳もなし、財寶としては更らになし、世をいたづらに過したる、つたなき身にもみ光の、中に安住出來るとは、これ念佛のお蔭なり。

三千餘年のその昔、近くば七百有餘年、御身を捨て説き玉ふ、御二方（釋尊と法然上人）の賜ぞ。かゝる目出度念佛をつとめ勵みて申すべし。働く時も休む間も——。

たとひこの後に如何程の、よきみ教えがあろうとも、必ず迷ふこと勿れ。釋迦牟尼世尊の御出世も、法然様の御苦勞も、只念佛を説かんため。あゝ有難や南無阿彌陀佛。

母の願ひは外になし、唯念佛を頼みます。母の心を汲みとりて、先祖代々傳はれる、我が宗淨土の菩提寺へ、まことのみちを求むべし。

いのちあるうち一筆を、添へて残すも子や孫へ——。

泣いてならうか勝ち抜くまでは、たとひあの子が死んだとて。

折角男子と生れ來ても、世間並みに國家のお役にも立つ事出來ずあはれ病ひの爲め夭折したひとり子の死にも涙を秘めて、雄々しく銃後のつとめに盡したけなげな軍國の母でもあつた。されどいくら強がりを見せも、女は女、母は矢張り母である。今や歸らぬ亡き子の追憶に人知れず泣いた涙の主でもあつた。

とことには歸らぬ旅へ出でし子のせめて古文（ふるふみ）新しく讀む。

そして又彼の女は夫亡きあとの若き日の空聞の寂しさをも、歌に托する程の詩情をも解してゐた。

さびしさを花に言はんと庭に出れば、仲むつまじき蝶に見とれし。寒空の月に語れば面かげの、さゝやくごとく目にうつるかな。

この奔放大膽な歌に秘められた亡き夫への切々たる慕情を、誰か女々しいと笑へようか。かくして生活の支柱を失つた當時は經濟上の窮迫、身邊の誘惑等、いつの世も若き未亡人がうける世の冷酷さを、あますところなく體驗し、遂ひに人生の瀬戸際まで追ひつめられ、一時は世へのうらみ、つらみ、不平不満から自暴自棄に陥り、死を決心した事さえあつたらしい。

—三—

然し法縁は遂ひに到來。孤島の白蓮は開花した。即一とたび檀那寺の五重に入行したり、又は來島知名布教師の懇切な教化に浴してより、これまでかこち勝ちの我が身の不運をして、そのまゝ宿業深き業人なりと、自ら素直に忍受することに先づ開眼させられたのである。そして更らに又、如來大悲の聖乳たる念佛の日課が加味せらるゝ事によつて、胸の法灯は益々點火され一躍人生の果報者と自ら信受されると云ふ焦點にいさゝかの狂ひもない信仰が、深度に頂け初めたのである。この間の消息は次の自詠に聞こう。

五重相傳うけたるからは、二河の白道まつしぐら。

人の世に恵まれ得ざるこの身にも唯念佛はうれしかりけり。

たゞたのむ彌陀のお慈悲のあるばかり、人の心のうすきこの世に。

わたしや罪の子よ、でも仕合せよ、如來親様持つからは。

あみだ佛と稱ふるたびにわがちから、増すは不思議やうれしかりけり。

ひろき家に取り残されてたゞひとり、仰ぐ二尊（阿彌陀如來と法然上人）とねるも起きるも。

今日からは泣かぬ私よ、よし泣いたとて、うれし涙の貰ひ泣き。

はるかなる聖きみくにへ旅立たん、み親は笑みてわれを迎えん。

等、すでに己れの愚昧な一爲一行みな如來大悲の恩寵に生きると云ふ、感恩報謝の歡びが、隨所にその鋒鋦を露し、且又詩魂の昇華までが見られるのである。

さればこの入信の過程を吐露した數々の道詠こそ、念佛の教徒の箴言として朝夕朗々と愛誦すべき絶好の名吟ではあるまいか。

そして又かくも凡人淨土に轍し得た彼の女こそ、天晴れ玄海に薫り咲く一輪の白蓮と稱すべきであらう。（了） 三二、五、二九

——(五)——記——日——印——滯——



——也——眞——井——日——春——

——便利な言葉——

昔も今も外國語をならふと、すぐ直面するのがイエスとノーと日本語のはいといいえの相違について、むづかしい考へすぎをやるのである。インドに来て見るとカルカッタについたとき大學の事務局から出迎へに来てくれてゐたガンギリさんと話して、すぐ氣がついたのであるが、すぐ頭を左に傾けるのであつた。これは發音が悪くて判らなかつたのかと思つてあわててもう一度云ひなほすと、今度はうなづきながら更に大きく肩から左に傾けるのであつた。もう一度繰返すのもと思つて止めたりしたのであつた。これがインド人の判りましたといふときのゼスチュアであつた。なれて來ると學生たちが話しに來たとき判つたと云はなくても頭を少し小さく左か右かに傾げるだけで判つたといふことを味へる。便利な身振りでもある。便利なことと云へば挨拶の言葉がある。ナマス・テーと云ふ言葉である。これは「ナマス・カー」でもかまわない。本來は「アナタに歸依します」といふ宗教的な意味をもつてゐたのであるが、今では「おはよう」にも「今日わ」にも「今晚わ」にも共通に用ひられる。身振りでは「合

掌」である。大きく澄んだ美しい黒眼が、じつとこちらを見つめて靜かな動作で「合掌」しながら「ナマス・テー」と語り合つてゐるのは、まこと佛の國の姿現に見る如き心地がする。これは朝なれば「おはよう」に、日中なれば「今日わ」に夕方なれば「今晚わ」の意味になる。また「アツチャー」といふ言葉も便利な言葉である。もとは「よろしい」「承知しました」といふやうな意味に用ひられたのがはじめであるが、良い悪い思ひといふときの「良い」にも用ひられ、また「ハイ」の意味にもまた、「オヤ・オヤ」といふ様な意味の感投詞にも用ひられる。しかし日本で用ひられる様にフランス語の否定詞の後半分をつけた様な「アツチャ・バー」などといふ様な用ひ方はインドでは用ひられない。日本語でもこの頃の言葉では他家を訪ねて「御免下さい」といつてよびかけるよびかけ方は昔の禪僧が「おたのもうす」とよびかけたやり方と同じ言語環境をもつものである。この「おたのもうす」は今でも、日本海沿ひのところどころの田舎で「おたのもう」といふ形で残つてゐることなどは生きてゐる言葉の姿としてはおもしろい。現代はラジオといふ大きなローラーで國土を普遍なく撫ぜまわして仕舞ふ

言語暴力の横行してゐる時代なのであつて良い言葉ばかりでなく、變な言葉の種子をもいろいろな形でまきつけて仕舞つて、それがどの様に受取られてゐるかといふ事には一向無責任な暴力野放しの態であるが、その結果といふ事についても少しは考へてほしいと思うのも一寸インドほけして來たから云ふ癡言とはかざるまい。私はいま此處ベンガリー語やヒンディ語といふ日本語と同じ言語配列をもつ言語域に住んで見て、日本語の將來を思ふこと切實なものがある。この氣持の判つて呉れる人があるだろうか。

——インド人の名前——

インド人は酒はのまない。この事は昔からの永年に亘る宗教的な束縛の一つの良い面なのであるが、サンスクリットの文献を見ていてもいろいろの酒の種類がならべられてゐるところを見ると、インド人は酒に關する知識はもつてゐた様である。こゝにいふ知識は飲酒しなくても判ることなのであるから、インド人が酒をのまないといふことは何か宗教的な意味の方が強いと見なければならぬ。ところで私の家の隣はお醫者さんの家である。インドのお醫者さんは特別な職業であるだけに、

他の種族とはちがつて別なカストに屬してゐる様であつて、代々世襲でやつて來てゐたらしい。勿論このドクター・ムケルチーは近代的な醫學の修業を終らしてゐてサンチニケー

タン近在では最も信頼せられてゐる醫者の一人であるが、この息子さんも醫業を繼ぐためにカルカッタの醫大に學んでゐる。この息子さんのお名前がかつてゐてシユテンドウジといふのである。日本語に當てて見ると何のことではない「酒吞童子」である。大江山に住んだ酒豪である。この大江山は丹波の大江山ではなく、桂離宮の近くにある大枝村の事を云ふらしいのであるから、こゝにいふ口碑傳承の解釋については廣い視野からの検討が望ましい事は云ふまでもない。シユテンドウジといふベンガリー・ネームの由來はまだ聞いてゐないが、多くの子供たちはすべて宗教的な神の名前によつて名づけられてゐる。ベンガリーの地域はシヴァ神信仰のシャクティ（性力派）のタントラ（密乗）の宗教が盛なのであるから、やはり日本と同じ様に子供たちには良い名前をつけるのかも知れない。ウマーといふ名のお名などは日本の豐子にでもあたるのであろうか。シヤマといふ子は「靜子」さんなのだらう。私たちの名前は姓の方は別とし

て、名の方は、インド人には極めて判りやすい名であるらしい事は何か大へん便利が良い様な氣がする事がある。

——インドの果物——

食后には果物が出るのはインドでも日本でも西洋でも共通である。一寸むづかしい話がつづいたので果物の事を書いて、今回の滞印一年の記事は終了にしたい。こゝベンガル州では年中バナナがある。これは幾十もの種類があつてこの土地で出来るものは細い短いものである。果實屋で購入する單位はダースである、十二本で日本金で云へば二十圓から三十圓位である。大型の美味、芳香のある特別に上等のものになると五十圓位もするが、こゝにいふ種類のものは此處サンチニケータンでは入手出来ない。カルカッタの市内の市場に時々出る位である。インドの果物の王者はやはりマンゴーである。日本の富有柿に似た舌ざわりであるが甘味と芳香が得も云へぬ味覺をそそる。これにも幾つかの種類がある。四月―五月の六十日間はこの果物があるので本當にたのしい。同じころ少し早くリイチーの出さかりである。これは南支から海南島のものが美味であるといふ事はシナの記録でも見かけ

事が残つて居ります。今後ともいろいろ御鞭撻下さい。

無題

るがインドのものも少し大型でおいしい。薄命の佳人楊貴妃が特に好んで早馬に命じて南シナから騎田嶺、梅嶺關の嶮を夜を日に次いで走らせしめた由緒の果實である。パイヤも美味しい果實である。黄金色の多肉漿液に豊み、中に黒い小豆粒ほどの種子が多数にある。少し異つた香がするがそれになれさへすれば、ちつとも差つかへがない。インドの水爪は全く味が無い。それでもインド人は美味しく思ふらしい。パイナップルはブンガルでは南インドから来るものよりシンガポールからの輸入ものが出まわらしい。オレンジは中インドのナグプール附近に産地があると云ふ。林檎はヒマラヤの山麓の丘陵地帯からもたらされるものである。梨もあることはあるしかし固くて水分も少い。總じて云へば美味しいものもあることはあるけれども、やはり日本の果は最もすぐれてゐると云へる。春の櫻んぼ、いちご、初夏の枇杷、夏の水瓜、秋の柿、梨、冬の密柑、林檎、さすがは日本は果實の王國である。特に私は富有柿の味を思ひ出す。そして松茸と。

いささか郷愁の情が湧きます。あと一年半ほど居て一旦は内地にかへりたいと思つてゐます。日本でもやらねばならぬやりかけの仕

日本に居たとき關西アジア協會の會長をして居られるオランダ人のバン・ウェストさんに御近づきを得た。この人は製糖技師として東南アジアの諸島を殆んど經めぐつた旅行家であつて多くの地圖と寫本の資料をもつて京都に永住の決意で居られる親日家の一人である。この人の長い南洋生活を通じての私の渡印に際する唯一の御注意は、「早く水でお尻が洗える様になりなさい」という事であつた。船の中では不自由はなかつた。ビルマのラングーンに寄港したとき、そこに一年あまり比丘生活をやつてゐる日本の誰彼に御目にかかれたとき、平素よく存じ上げていた親しさから、この人達にその事についてたづねて見た。ところがこの人達は佛教國ビルマの最高級の建物に、日本から來て呉れた比丘たちとして最高級の尊敬と待遇を受けて生活してゐるのであつたから、「必要なものは全部請求して補給してもらつていますから、まだやつて居りません」という返事であつた。少々期待外れでガッカリしたのであるが、インドについて見ると紙は殆んど全部ノールウェー

製である。そして高價である。インド人は誰でも、いつでもよく安全ピンを用いるが、これとてもドイツ製がインド製のみならず他國品を壓倒してゐる。此は便利よく大・中・小の十二本組合せで日本の金に換算して十圓ほどである。この安いものと高いトイレット・ペーパーを考へるだけで、インド政府がインドの民衆の生活をよく考へてゐる事が判きりわかるのであつた。日本なればきつと生活の必需品になつてゐる様な安全ピンが高くて、特別な少數の人達しか用いないトイレット・ペーパーの方がうんと安いに違ひないと思へたりした。私はまだバン・ウェストさんの御注告の通りにはなつていないが、いまのところ紙と水との兩方を用いてゐる。一般のインド人の土民の家には便所というものが設けてない。従つて彼等は野外にしゃがんで用を達すらしい。そのあとの始末は少量の水だけらしい。そのあとの遺留品の始末については、至るところに現われる蟻の任務である。又はばしい天日の直射だけでも結構自家分解を起して粉末狀になつて仕舞うらしい。このたびは見事に頭为天辺から下の末端まですべり落ちた。謹み乍ら妄言多謝。

芋掘り権助の話

石川 忠 正

むかしむかし、奥州蒲谷の里の片隅に、権助という水呑百姓が住んで居ました。枯葦の中にでもかくれて了いそうな、つぶれかゝつた権助の小舎の前には、うねうねと曲つた江合川が一年中とらとらと流れていましたし、うしろには笹岳山をはじめ、いくつもの低い山々が重なり合つていました。

権助は米作りや麥作りが餘り上手ではありませんでした。それに自分の耕やしている僅かな田畑も小作地なので、年貢に追われていつもひどい貧乏活しをしていました。それで権助は、いつからということもなく、山へ入

つて山芋を掘り、里の人々にそれを賣つて、どうにかこうにか細々と生活をつづけていました。

こうして権助が三十五、六にもなる頃にはそれこそ山という山の殆んどを歩き盡しましたので、毎年どこにはどんな山芋が育つかすつかり憶えて了いました。で、権助はいつものまにか、里の人々に、山芋採りの名人と稱ばれるように、なつたのです。

或る年の初秋、権助はいつものように、たぐ、あんと掘りめしを腰に結えつけて、山へ出かけました。その日は赤蜻蛉が群がって空高

くすいすいと遊いでいる上々の好天氣でしたが、どうしたとか、行けども行けども芋はさつぱり見つからないのです。おひる近くなつたと思われる頃、いくつ目かの谷を涉つて又草を掻き分けて少し登ると、笹藪にからみついた山芋の蔓が見えました。近よつて見ると、それはいままでに見たことも聞いたこともない程、莖の太い、葉の大きな蔓でした。

喜んだ権助は、まずまずこれで半日歩きまわつた甲斐があつたわい、と腰を下ろして汗を拭き掘りめしを頬ばりました。そして、充分に腹ごしらえをすると早速芋掘りに取りかかりましたが、いやその太いこと、凡そ一抱えもありそうなので、権助は思はずあつ、と腰を抜かすところでした。しかしその驚きは忽ち大きな喜びに變つて、権助はときどきする胸を押えながら、夢中で掘つてゆきました。

夕方迄掘りましたが芋はまだ下へずつとつづいていのです。穴の深さはもうすでに権助の背丈の二倍以上になつていました。権助は穴のところどころに足がかりをつけて、漸く外へ這い上ることができました。

次の日は朝早くから繩を用意して行つて、

穴の近くの木の根に縄を結びつけ、それを力に、穴を出たり入つたりして、せつせと一日中掘り進みましたが、芋はまだまだ下へつずいてゐるのです。

その翌日もそうでした。その又翌日もまだ終りません。そして五日目の晝ごろになつてようやく、芋のいちばん下迄掘り盡くすことが出来たのですが、そのときの穴の深さは、湧谷の里でいちばん深いと云われている井戸と、大體同じ位の深さになつていました。

さて、その山芋を地上へ引張り出す段になつて、權助は全く途方にくれてしまいました。とても一人では動かすことができないのです。

權助は考えました。この芋一本あれば、今年一冬喰う位の米は、らくらくと買うことができるだろう。しかし自分一人では重たくてどうにもならない。この芋はきつと山の神様が、里の衆皆で喰べるようにと、お授け下さつたのだ。そうでなければ、こんなに太くて長い芋が育つわけがない。そうだ、それに違いない。そうときまれば、里の衆に知らせ、皆で力を合わせてこの芋を運び出すことにし

よう、とそう決心をしました。

里の衆は、汗と泥にまみれた權助の話聞いて、初めはびつくりしてなかなか信じませんでした。が、だんだんに本當のことだと知ると大喜びで手助けを引受けてくれました。

大勢の人はわいわい山へ登つてゆき、深い穴の中に、化物のような山芋が、ごつごつとこぶだらけの素肌を見せて、ごろんと轉がっているのを見ますと、肝をつぶして驚きました。

やつと騒ぎが鎮まると、人々は、よいと卷け式の滑車を組立て、丈夫な麻縄で山芋をくくり、權助は穴の中に降りました。穴の底で權助が「ほいきたア！」と合圖の聲を挙げると、大勢は賑やかに木遣り音頭を唄いながら、エンヤ、エンヤ、と綱を卷上げました。

芋はぐらりと身を立てると、しずしずとせり上つてゆきます。權助はすつかり有頂天になつて了い、ありつたけの聲を張りあげて、よしよの掛聲をかけて芋の尻押しをしていましたが、そのうちに穴の中に取残されそうになつたので、あわてゝ芋にしがみつ、聲だけ威勢よく張上げていました。そんなことと

は知らない地上の人々は、木遣り音頭で力を合わせ、一所懸命に綱を巻き上げました。やがて山芋の巨大な姿が、地上に半ば以上現われたと思うころ、ぽきつ、と大きな音がすると、山芋がど眞中から折れて了いました。取纏つていた權助は、残りの芋もろとも、恐ろしい勢いで落ちて行きました。

權助は、氣を失つて了いました。何時間、いや或いは何日間かも知れませんが、長い時間を経て、權助は息を吹き返しました。目をこすつてあたりを見廻しましたが、たゞ眞暗な闇があるばかりで、西も東も解りません。山芋はどうしたろう、と手をさぐつて這いまわりましたが何一つ手に觸れものはないのです。がつかりして地べたにあぐらをかいて座つてはみたものの、物音ひとつしないのです。しんしんと自分を包んでいる暗闇の中に吐く息までが凝り固まつて了いそうな氣がします。村の和尚に聞いた無間地獄に自分は落ちたのではないだろうか、と思うと權助は、空恐ろしくなつて思わず南無阿彌陀佛といいました。その所爲かどうか、ぼんやりあてどもなく睨にらんでいた權助の目に、遠くかすかに

灯火らしいものの、ゆらめくのが、見えたのです。權助ははつ、と氣を取直して、明りの見える方へ歩き出しました。その中に灯火が消えたらどうしようという不安に追われて、權助は息を切らしながら夢中で歩きつづけました。そうして暫らく行くと、突然ぱつと目の前が明るくなりました。長いこと暗いところに居たので、明るさがまぶしく、權助は兩手で顔を覆つて、そこに立止りました。

光に馴れるにつれて、目を開いて見ると、行手の路の傍に大きな地藏様が立つて居られます。その地藏様が、全身から清々しい光を放つて、四方を照らしているのです。權助は走り寄つて、その前にひれ伏すと、泣きながら、

「お地藏さま、一體此處はどこでござります、どうぞ、おらとこ助けて下せえ」

と、訴えました。

地藏様は、おごそかな聲で申されました。

「權助、ここをどこだと思ふ。ここは俗にいう地獄の一丁目じや。この道を先に進めば恐ろしい針の山や、血の池地獄、焦熱地獄などがあり、赤鬼黒鬼がいつばい住んでいるの

じやぞ。お前はどうしてもここへ來たのじや」

權助は、涙を拭き拭き、ここ迄來た次第を詳しく語りました。すると地藏様は、

「不憫な奴じや。一度ここへ來た人間はふたゝび地上へ戻ることは叶わぬのじやが、聞けば、お前は大した罪科もなさそうだ。よろしい、わしの特別の計いで、家へ歸すことにする」

と申されました。權助は、嬉しさの餘り、わつ、と聲をあげて泣き伏しました。

但し守らねばならぬことがあるのじや。よいかここに十本の線香がある。これをお前に授けるが、これは、必ず一日に一本宛^{もと}點すのじやぞ。二本又は三本と、一度に何本も火を點ければ望みは叶わぬと思えよ。それさえ固く守ることが出きたら、十本目が燃え盡くす十日目には、間違ひなく家に着くであらう」

「有難うござります、有難うござります」と、權助は、その十本の線香を押しいたゞき、地藏様に恭々しくお暇を告げて、まず一本の線香に火を點けました。線香に火が點くと同時に、目に見えぬ何ものかの力が權助にはたらいで、足がひとりでに動くのでした。

權助としては、少しでも早く家へ歸りたいので、出きるだけ急ごうと思ふのですが、足はまるで權助の意志とは別に早くもならなければ、又、遅くもならないのでした。

二日目もまた一本の線香に火を點けて、歩き出しましたが、心の焦りと別に路は一向歩らず、權助は次第に焦々してきました。しかし、必ず一日一本じやぞ、といわれた地藏様の仰せを破つては不可ないと思ひ、辛抱して歩き續けました。

だが、三日目には「一本宛で十日かかるのなら、これは確か、二本點ければ倍の早さになるに違ひない。お地藏様だつて、もうここ迄はお目が届かないだらうから? とにかく試してみよう」と、自分勝手な理屈を考えて二本の線香に火を點けてみました。すると、權助の足は、二倍どころか、三倍も早く動くのです。權助は、自分の考えが、豫想以上に當つたので、すっかり面白くなりました。

四日目、權助は、地藏様の注意などきれいに忘れて了い「どうも二本宛でも面倒臭えから、今日は一つ六本を束にして火いつけてやんべ。今頃アまだ里の衆、おらとこ助けべと

して、山中でわいわい騒いでんべな。アハアハ、今日すうつと家さ歸つて、知らぬ顔の半兵衛で寝てることにすつべ。みんな、なんぼが魂消んだか」と、浮々しながら、残りの線香を束にして、火を點けました。途端に權助の身體は、矢のような速さで走りだしました。權助が目を白黒するうちに、いよいよ勢いがついてきて、忽ち地上に飛び出したことと思うと、彈丸のような速さで、あつという間に江合川を越し、自分の小舎の上を通り過ぎて、線香が燃え盡きたときには、天上界の雲の上に投げ出されていました。

息も絶え絶えになつた權助は、冷い風に吹かれて正氣に戻ると、天罰とはこのことかと思ひ、地藏様の注意を守らなかつた自分の浅慮を今更のように嘆きました。しかし、泣いても嘆いても、雲の上には權助を救つてくれそうな人は、とても居ると思えません。權助は、力無く立上つて、あてもなくとぼとぼと、雲の上を歩き出しました。

しばらく彷徨するうちに、遙か向うにふと黒い物が見えました。又しばらく歩を進めてから、目を凝らしてみると、どこかに見覚え

のある建物です。權助は、文字通り足を宙にして馳せつけてみました。建物の正面に、雲南天神と書かれた金色の額が掲げてあります。權助はみるみる目を輝やかしました。

「こりやあ村の雷神さまの老家がす。天の助けというなあ、ことことだんべ。この雷神さまなら、はあ、きつと、おら村のお社さ行く道知つてんべで、お頼みして、なんとか連れでつて貰うことにすつべ。はあ、いかつた、いかつた(良かつた)」と、中へ入りこんで待つて居ましたが、疲れ切つていたので、ついうとうと睡つて了いました。

夢うつで横になつていた權助の耳に、何やらざわめく氣配が聞こえてきました。間もなく生臭い風が、さあつ、と吹きこんでくると同時に、どしつ、どしつ、と權助の身體が飛上りそうになるほど強い足音を轟かせて入つて來たものがあります。ぎよつとして身を起した權助に、見えたものは、虎の皮の褌をつけて、大太鼓を背負つた赤鬼、小太鼓を持つた小柄な桃色の鬼、風袋を小脇に抱えた黒鬼、雨袋を背にした青鬼等々、そしてその真中に一きわ巨大な雷神様が、金の太幣束を杖に、

茶碗のような目玉からびかびか光芒を發しながら、そろそろ仲間を手下を連れて、權助の方へ近寄つてくるのです。權助は恐ろしさの餘り「あつ！」と一聲叫んだきり、その場へ腰を抜かし、ふつと目の前が暗くなつて、失心してしまいました。

雷神様や他の神々も、天上界の御殿に下界の人間が居るので、いさゝか驚き、取圍んで權助の顔を覗きこみました。

「やあ、これは涌谷の里の權助めにござります」

と、風の神がひようひようとしたかすれ聲で云いました。

「なに、芋掘り權助か。何を迷うて、かゝる天上界に飛上つて來たのじゃ。どれどれ」雷神様が、權助の肩に手をやつて、ほんの僅かですがエレキをかけました、權助は身體にビリビリッ、と電流が流れましたので、身振いして目覺めました。みると、自分の周りを恐ろしげな鬼神達がぐるつと取まいてるので、權助は縮みあがつてひれ伏しました。

「どうぞ、はあ、堪忍して下せえ……」

「權助、何も恐れるでない。たゞ、見ての

通りここは天上界じゃぞ。羽根も無いお前が
 どのようなにしてここへ来たのじゃ。鳶に攫わ
 れる年でもあるまい、譯を申せ」

と、雷神様が破鐘のような聲を出きるだけ
 優しくして、訊ねられました。權助は、芋掘
 りのてんまつから、地獄へ落ち、地藏様のお
 情けで家へ歸る途中、線香を燃やし過ぎて了
 つてこの始末と、つゝみかくさず、言上しま
 した。

「ここな横着者奴が。地藏様のお云いつけ
 を守らぬから、どこまでも苦しむのじゃ」

「はい、申譯ねえでがす、もうお地藏さま
 のお目が届かねよだろと、早く家さ歸りてえ
 一心で、お言葉をすとんと忘れたおらが悪か
 ったです。ほんとに悪かつたです。はい」

「うむ、悪いということに氣がついたか。

考えてみれば、お前は日頃貧乏でありながら
 世の中を恨みもせず、他人の物を盗みもせず
 とにかく汗水流して働きつづけている可哀想
 な奴じゃ。家では女房も子供もさぞ心配して
 いるじやろう。まあ今度のことは許してやろ
 う」

「雷神さまア、濟まねえです、なんともは

あ」

「まだ喜ぶのは早いぞ。わしはいつでも涌
 谷の里へ行けるのではないのじゃ。年に一度
 六月祭の折に、下界へ下りるだけじゃで、そ
 れまで、ここに居てわしらの仕事を手傳いな
 がら待つものじゃ。よいな」

「生命ばり助かれば、それで結構でがす。
 なんでもい良いから手傳わせて下せえ」

その夜は、御殿の片隅に、虎の皮の布團を
 與えられて、何日ぶりかでぐつすりと眠るこ
 とができました。

翌朝明るくなつても、毛皮の布團の寢心地
 よさと、溜つた疲れとで、權助は、あんどろり
 口を開けて眠りこけていますと。突然、ドド
 ソ、ゴロゴロ、ドンピカリ、と烈しい物音と
 電流が天上界に響きわたりました。それが、
 雷神一族の、起床の合圖なのでした。權助は
 眠氣など一べんに吹飛んで、跳起きました。
 流れる雲で顔を洗い、御殿の食堂へ行くと、
 權助の分のお皿に、山とへッの佃煮が盛られ
 てありました。雷神様が、一番上座に座つて
 いて、申されました。

「これ權助、お前も知つていると思うが、

目下、下界では旱魃が続いておる。もう幾日
 も雨乞いが行われている様子じゃで、今日は
 わしら一族總出で、雨を降らせようと思う。
 まずその佃煮を喰うて、腹ごしらえをせい」
 へッのつくだ煮を、恐る恐る喰べてみます
 と、すつばいような、あまいような、辛いよ
 うな、にがいような、世の中の食物を全部合
 わせたらこんな味になるかと、思うような味
 がしました。一皿喰べると、腹がふくれて、
 どつしりと腰が落着いたような、感じがして
 きました。

「どうも、えらくご馳走さまでがした」

雷神様は、につこり、鬚面を綻ろばせて、
 「それだけ喰えば、今日一日走りまわつても
 腹は減らぬぞ。では皆の者、用意じゃ」

權助には、風と書かれた小さ目の袋と、雨
 と書かれたいく分大きな袋と、二つの袋が與
 えられました。雷神様が、

「よいか、面白半分調子に乗つて、馴れぬ
 雲の上から、足を踏みはずすでないぞ。お前
 は西から南へかけて、その袋のありつたけを
 降らせるのじゃ。氣をつけて行けい」

はつ、と權助がかしこまると、雷神様は、
 空一杯にひびきわたる大音聲で、

「皆の者、用意はよいか。それえつ」

と、一打強く大太鼓を打ち鳴らし、金の大幣束を左右に振りましました。すると、金の幣束からビカリ、ビカリ、と稻妻が迸り出て地上へ落ちて行きます。それに合わせて、大太鼓、小太鼓がドンゴロドンゴロ鳴らされるので、天上界は、たちまち賑やかになつていきました。權助も、教えられた通り、風袋を開くと黒い雨雲が、さあつ、と湧きだしますので、その上を雨袋の口を開けながら馳けずり廻りました。だんだん調子がでてきて、飛んだり跳ねたり、夢中になつて雨を降らしましたが、その中、ふと氣がつくと、ひどく遠いところへ來ているのです。吃驚して、風袋を開いて御殿の方へ戻ろうとしましたが、袋はすでに空になつていました。雨の袋も空でした。權助は歩いて歸るほかはありません。天上界は、とつくに鳴りをひそめて、日がずつと西へ傾き、美しい虹の頭が雲の上に抜き出ていました。權助は、元來た雲の道を、とぼとぼ引返しながら、日の昏れぬ中に歸り着けるものやらと不安で、心細くて、胸が締めつけられるような淋しさに襲われました。

空となつた二つの袋を腰に巻いて、肩をおとして力なくゆく權助の足元に、ちよつぱり雲の切目があつて、一日降りつづいた雨にす

つかり生色をとりもどした、濡れそぼつた緑の野山がちらりと見えました。何氣なくそれを見下した權助は、おや、と立止つて、よく見るとそこは懐しい篋岳山の眞上なのです。「お、おらの村だ」と、思わず身を乗り出したときには、もう、雲を踏みはずして、あつ、と悲鳴を挙げましたが、どうすることもできません。眞逆様に、墜落して行きます。

丁度、その頃、權助の歸りが遅いので、疾風に乘つて捜しに出た雷神様が、矢のように墜落してゆく權助の不ざまな姿を發見しました。

「相變らず間拔けな奴じや。見つけるのがもう少し遅かつたら、死ぬところじやつた」と云つて、金の大幣束を、やつ、と一振り振りますと、ビカツと、鋭い一本の稻妻が走つて權助の腰に巻いた風袋に當りました。風袋は見るまにふくれて、權助は地上寸前で落ちるのが止り、ふわりふわりと漂いはじめました。雷神様は、

「あれでなんとか助かるじやろ。六月祭には下界へ行つて逢えるじやろから、そのときはみつちり小言を云わねばなるまい」

と、呟やいて御殿へお戻りになりました。

次の日の朝、涌谷の里では、大變な騒ぎが起りました。穴へ落ちたまゝ消えて了つた筈の權助が、えたいの知れない布切にからまつて、あろうことか、自分の家の梨の木にひつかゝつていたからです。寄つてたかつて木からおろし、手當を加えますと、どうやらかすかに息をふきかえしましたが、何を聞いてもわけのわからぬ謔言を云うばかりでした。

二、三日して、正氣になつた權助は、自分の遭遇した、いとも不思議な事件を、ありのままに一所懸命話しましたが、聞く人は、そんなバカげた話が此の世にあるものかと、そう云つて、誰一人信ずる者がいないのでした。天上界から落ちて來たなんて、權助は、大方、あの後山にかくれていて、俺等を吃驚させたいばかりに、木に登つてぶらさがつたのじやろ御苦勞さまなことだ、眞面目に話せば話す程腹を抱えて笑い出すのです。しまいに權助は諦めて、何も云わなくなりしました。そして、以前にも増して、せつせと働くようになりました。

それから、里の人達の間で、ありそうもないバカげた話を權助の天からの落ちて來た話のようだと言つて落し話と云うようになつたのだそうです。

阿彌陀經の理解 (一)

福 富 海 岳

序 文

福富海岳師多年の布教研究の結果、傳道文書として『阿彌陀經の「研究」の理解について』を拜讀して、最も感ずることは、よく本經の趣旨を體得され、身讀念佛されつゝあることであります。流石は多年宗門の興廢に獻身され、布教傳道の熱意に働かれつゝある同師の面影を忍ぶことが出來得るのであります。

而して、三經一徹、三身即一の意を明確にして、史上現實の釋尊說法の様相根源を提示し、而かも法然上人に到るまでの思想信行を明かにされたることは特に大切であり、且つ純未來教と誤られることなく、現在の人類を如何に救済し、幸福なる人生々活を進め得る根底を信行の一念により説明し、而かも理想としての俱會一處も、

現實に期待し得る教であると本經の理解を以つて説明し得たることは布教の骨目を得たるものであると信じます。

今や宗祖七百五十年御忌を迎へるに當りまして、布教文獻として提出せられた各種文書の中にありて最も光彩を放つものたることを信じて疑いません。私は將來増々此の種の實證的布教文書數多發表されんことを希うものであります。

中 野 隆 元

は し が き

無上甚深微妙の法は

百千萬劫にも遭遇うこと難し

我今見聞し受持する事を得たり

願くは如來の眞實義を解せしめ給え

經典の意義を理解せずにこれを讀誦することは全く意味がない。しかも理解せぬまゝに讀誦して施物を受取ることは不淨說法であり五逆罪にも等しい正法の誹謗である。淨土三部經の理解は、必ず攝取不捨の照益によるから、攝取の照益なしに阿彌陀經を理解することは、絶対に不可能である。このことはお念佛についてもまた全く同一で、一枚起請文に「唯往生極樂のためには南無阿彌陀佛と申して疑なく往生するぞと思ひとりて申す外には別の子細候はず」とある如く、往生するぞと思ひとることが何よりも大切であることを忘れてはならない。白いものを白と思ひとり黒いものを黒と思ひとることができるのは太陽の光や大自然の恵みによる以外の何者でもなく、阿彌陀經やお念佛の有難さを理解さして戴くこともこれと同様である。往生するぞと思ひとつて念佛させて戴けるのは、佛光照益の力による外はない。

ところが阿彌陀經が果して現在淨土宗の一般宗侶によく理解され生きた信仰の事實として寺庭檀信徒を慈育する源泉となつてゐるであらうか。西方過十萬億佛土の極樂の存在が單なるお伽噺に終つてゐるのではないであらうか。それでは不淨說法であり、謗法であつて、一宗として眞に慚愧に堪えないことである。現在の淨土宗が元祖大師の七百五十年の御忌を前にして二派に分裂し、醜い争いを續けている原因も、この不淨說法を謗法に對する自覺感性が全く無くなつてしまつてゐるためだと考えられる。

従つて宗侶にこの反省があれば、念佛して必ず攝取の照益を受け

得るのであり、それは明かに淨土宗の復興を示すものである。また法然上人の信仰に還るのであるから、二派の對立は自然に解消し、合一するに到るものと思う。この反省なくして、元祖大師七百五十年の御忌を奉修する意義はあり得ない。それは共に淨土宗ならざるもの、合一であるからである。そこでどうしても淨土三部經の正解が一般的に普及し徹底することを念願し切望せざるを得ないのである。良貨は惡貨を驅逐するのであるから、法然上人の淨土教は良貨として新らしい日本の平和と繁榮のための柱となり眼目となることができる。要は一般宗侶が僧寶としての自覺に立つことで、この粗末な著作がなんらかの意味で宗侶を刺戟し、阿彌陀經が正しく理解され讀誦されるに到るならばこれ以上のよろこびはない。 著者

三寶は常住している

佛法僧の三寶は常に我等の周圍にある。従つて攝取の照益を受ければ、現實にこれを見聞して、その中で育てられつゝある自分を發見することができる。それは一粒の豆種が土中にあつて大自然の恵みを受けて發芽し生長するのとなんら變るところがない。大自然は美と愛の無盡の寶庫であると言へられており、その美と愛と智慧を口稱念佛して受取ることができるから、佛は現實に我等の周圍に常住し給うことを知るのである。すなわち佛の常住するところ法も僧も必ず常住するものとみななければならぬから、我

等は何時でも、何處でも、念佛して佛の大智大悲を受取る
ことができるのである。阿彌陀經の理解も、要は念佛する
こと以外の何物でもない。

經名について

淨土宗所依の經典である淨土三部經のうち、他の二經が
無量壽經となつてゐるのに對して、經名が阿彌陀經である
ということは、實に有難く尊い。無量壽經の有難さは第十
八願の念佛往生の本願が成就されたことにあり、觀無量壽
經の有難さは「光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨」
にあると思う。だから心想羸劣なる韋提希の救済を通じて
未來世一切凡夫が稱名念佛によつて確實に救われると確信
することができ、本經によらなければ、六方諸佛の證
誠護念は明かにされない。淨土三部經は本經に於いて彌陀
の名を完うするのである。

キリスト教の神は全智全能であり最高唯一神であるとい
うが、まだ六方乃至十方諸佛の證誠護念であるをきかな
い。阿彌陀經こそ、大經、觀經と共に世界人類が有する最
高唯一の聖典であることを理解すべきである。

本經の成立

阿彌陀經は法華經やその他の諸大乘經典と共に釋尊の説

法が、滅後數百年の間に於いて次第に發達し成立するに到
つたもので、應身としての釋尊ではなく報身としての釋尊
であると考えざるを得ない。即ち釋尊の正報身の說法であ
つて換言すれば彌陀の現在說法と全く同一であるという
ことになる。本經では、釋尊と彌陀とは完全に一體である
から、眞は最高至上唯一無二の聖典となるのである。この
ことはキリスト教の場合に於いても同一で、それが宗教で
ある所以はイエスの昇天以後であり、私達はこれによつて
人類文化が如何に正しく發展しつゝあるかを理解すること
ができる。彌陀本願の念佛が釋尊出世の本懷であり、その
教説の眞髓がこの經にあることを否定することはできな
い。無量義經に四十餘年末顯眞實とあるからといつて、壽
觀彌の三經が法華爾前不眞實の經典として誹謗する如き
は、何等根據のないことで、謹んで、法然上人の淨土開宗
に對し感激し深謝すべきである。本經には執持名號一日乃
至七日すれば命終時に佛及び聖衆の來迎を受けて往生する
ことが明かにされ、釋尊が「我見是利」と仰せられている
ことは、入涅槃を前にして説かれた御一代佛教の結經であ
ることが證明されている。また壽觀彌の三經成立の前後に
關して上人は「觀經釋」に、三個の文證と一個の理證を舉
げて、大經の次に觀經が成立し、最後に本經が説かれたも
のであることが明かにされている。

又この釋尊の報身說法を現實に佛教史の問題として考える場合、それは滅後に於ける佛弟子并に繼承者達が、如何によく佛の眞精神を體得し佛教を正しく發達せしめたかということになるのである。換言すれば釋尊の正報身が現實に常住していることであり、その報身の說法をきくことなしに佛教の正しい發達はあり得ないということである。

本經の説處

本經の説處は祇樹給孤獨園ということになつており、一般に祇園精舍と呼ばれているところがそれである。けれども本經が釋尊の滅後に於いて成立した經典であるとすれば、矢張應身としての釋尊ではなく、報身說法ということになるから、この説處に對する實感が極めて稀薄なものとなることは否定されない。併し實際は應身說法には時處の制限があるが、報身說法にはその制限がなく全く自在で、祇園精舍たると靈鷲山たると支那たると日本たるとを問はないのである。釋尊が彌陀の報身に還られたと同じように舍利弗等の佛弟子達もまた等しく報身である釋尊のもとに還り、祇園精舍を道場として、釋迦彌陀一體の立場に於いてこの永世不滅の經典を説かれたと考えることは、報身佛の實在とその無礙自在の說法を信する以上必ずしも不可能でない。私達が今現に阿彌陀經を讀誦し、その說法を拜聽

している立場からは明かに報身佛の現在說法であるから、この經典をそのまゝ信することは何等の不都合をも感じないし、その説處に對する一層深い愛着をさえ感ずるのである。何故なら讀誦するところそこがそのまま説處となり、尊い祇園精舍の說法となるからである。

祇樹給孤獨園は舍衛國にあつて、もと波斯匿王の王子祇陀太子の所有地であつた。これを舍衛城に住む須達多という慈悲心に富み、貧乏人や孤獨の者を憐むことを唯一の樂しみとした富豪が釋尊に歸依して、その土地全體に黄金を敷きつめて買取つたと謂われ、土地の所有者であつた祇陀太子もこの長者の崇佛の念の篤いのに非常に感激し、その土地全體に立つている竹樹全部を佛に寄進した。斯くして立派に出來上つたのが祇樹給孤獨園であるといわれている。即ち祇樹は太子から寄進された樹を意味し給孤獨園は長者所有の土地ということである。

印度の龍樹菩薩は「智度論」卷二に經典の最初にある「如是我聞一時……」とあることについて六成就ということを明かにしているが、本經についてこの六成就を言え

- 一、如是は信成就
- 二、我聞は聞成就
- 三、一時は時成就

四、佛は主成就

五、在舍衛國祇樹給孤獨園は處成就

六、與大比丘衆から無量諸天大衆俱まで衆成就となる。

本經の聽衆

主成就はそのまゝ六成就であり、従つて必ず衆成就でなくてはならない。このことは經典を讀誦する者の深く反省しなければならぬ大切なことで、「自信教人信」ということなのである。私達は阿彌陀經を讀誦しているのでなく直接報身佛としての釋尊の說法を拜聽しているのであり、報身常住の故に說法もまた常住し何時でも何處でも自由に拜聽されるのである。従つて、祇園精舍だけが本經說法の道場ではなく、讀誦されているところそこがそのまゝ祇園精舍であり、同時に說法の道場である。いま本經の聽衆を大別すると、

一、舍利弗尊者を上首とする千二百五十人の大比丘衆、

二、文殊菩薩を上首とする大菩薩衆、

三、帝釋天その他無數の天部衆

となつてゐるが、その悉くが釋尊に従つてこの道場に影向されているであらう。我等もまたその聽衆の一人に加えられるのである。このことは單なる肉眼所見ではない

から、法然上人のみ教に従つて深く念佛し、その事實を懺める外はない。

月影のいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

とあるように、光明遍照十方世界ではあるが、たゞ念佛の衆生だけが攝取不捨の照益をうけ、この尊い釋尊の說法を理解することができぬ。

釋尊は本經の中で前後三十六回「舍利弗よ!!」「舍利弗よ!!」と親しくお呼びかけになり、懇に説かれているのであるが、十大弟子のうち智慧第一の舍利弗尊者がこの聽衆の代表者であることは意義深いことである。智慧第一の舍利弗だからこそ末來世一切凡夫の代表として完全に理解されるに到つたものと思う。かくしてこの法門は印度支那等を経て我が國に傳來し、當時智慧第一の法然上人によつて再度確實に理解され立派に結實したのである。元祖上人が本地勢至菩薩であることは、勅傳第八に、讚州生福寺に住み給しとき、自作の勢至菩薩像に、

「法然本地身、大勢至菩薩、爲度衆生故、顯置此道場」

と自書せられたとあることによつて明かであるが、上人を文殊菩薩とし、日本の釋尊と考へ、形を見れば源空上人まことは彌陀如來の應現かと尊崇され、その何れもその通

りであるけれども、本經說時に於ける舍利弗尊者でなかつたかと思う。何故なら本經の說時に於いて未來世一切凡夫のための第一の責任者が尊者であるし、もしそうでなければ主成就がそのまゝ衆成就にならないからである。

無問自說の經

本經には他の經典に見られない幾多の特色があるが、その中の一つは無問自說の經であるといふことである。大經は阿難の問に、觀經は韋提希夫人の問に、法華經は舍利弗の問に答へられている。ところが本經は誰一人お尋ねしている者が無いのに、佛自から「舍利弗よ!!」とお呼びかけになりお説きになつてゐる。間違なく釋尊出世の本懷であり、六方諸佛が勸信證誠護念讚歎せられている所以である。本經が無問自說の經典であることを始めて明かにして下さつたのは支那の天臺智者大師の「阿彌陀經疏」に於いてである。實に有難いことで恰も慈悲深い親がその子供の凡てを信じ切つて話しかけているのと同様變るところがない。佛は舍利弗及未來世一切凡夫を知り盡し信じ切つておられたのであるから、我等はこの無問自說の經典が決して簡単に成立したものでなく、御一代佛教の結經として結實したものであることを深く認識し、無理解のまゝ謗法の罪を重ねてはならない。

(十四頁よりつづく)

して行誡上人を中心として、識者相より刊行を企畫され、明治十三年四月弘教書院が設立されたのである。

同書院が中心となつて、刊行の諸準備は進められ、約一ヶ年を費して、翌十四年七月から刊行をはじめ、十八年七月になつて、四十帙四百十八冊八千五百三十四卷を刊行し終つたのである。毎月七冊宛の強行軍であつた、福田行誡上人を中心とした各大徳の涙のにじむ護法心には、只敬服の外はない。

今日佛教が國民生活と共に盛行されていることを見るは實にそのお陰さまである。

その後大正、國譯などと、相ついで刊行されている。いづれもその底本は三緣山増上寺の三大藏經である。換言するなれば、大藏經(一切經)は、日本人の生活の強力なる一の支柱として今日生きている。その支柱は餘りにも身近かであり、とけ合つているので氣付かぬ人多く、丁度親の恩には餘り氣付かぬと同様ではあるまいか。

大藏經は、大事な日本の支柱である、益々その光を遠近に輝かして、庶人の安心立命とし、人心の安定を圖り、精神文化の作興をはかり度い。

そこには、大聖釋尊の御心も、元祖圓光大師の御心も、共に亦生きていられる譯である。そうして、誰にでも、もつと生きる喜が湧出て、明るい社會を造りたい。

浄土の會員を一人でも多く

◆どなたでも會員になれます。

◆會費は半年二〇〇圓、年額四〇〇圓です。

◆會員には毎月浄土を配布します。

◆この會は皆様の會ですからその發展の爲に、お一人でも多くの會員をつくつて、正しい信仰運動を

ひろめましょう。お知合いの方々にぜひおすすめ

下さい。

◆お申込は振替（東京八二一八七番）を御利用下さい。

東京都品川区上大崎一の七八二

法然上人鑽仰會

編集後記

○微雨の季節である。草木は梅雨の中にすく／＼と成長をつづけている。たゞ温床の中だけでは生々とした潑らつたる成長をつづけることは出来ない。

○われ／＼の魂も、逆境に遭遇したときにこそ、みがかれ育くまれていくのである。そのはぐくみの力と意欲を念佛は養つてくれるのだ。

○恵まれざる人々のために寄せて戸松學瑛、丸山幽水の兩師より貴重なる玉稿を頂戴いたしました、再讀して明日へのよろこびある生活のいのちとなれば幸いこの上なしとするところです。

○首藤莞爾師よりも心に温味を感じる得難い原稿をお寄せいただき感謝申上ます。

○今月廿二、三の兩日第三回浄土教學大會が京都華頂短大で催され、本會よりも諸先生が大舉出席されます。尙、廿四日には家政學閣で浄土の集いが催されますので、關西の會員皆様は是非御參集下さい。（宮林）

會費（誌代）

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で**安全確實な振替**を利用して下さい、千圓まで二五圓の手數料で且、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か繼續會員かを明記して下さい。

「浄土」 六月 號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和三十三年五月廿五日印刷
昭和三十三年六月一日發行

（定價三十圓）

編輯人 竹 中 信 常

發行人 佐 藤 密 雄

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川区上大崎一ノ七八二

發行所 法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

幼児教育に専心する方々へ!!

指導外語教授増谷文雄 畫中村ひろし
監修東大、大正講師
教養法然さま
定價B五判一〇四頁
定價二〇〇圓一〇四頁
(十部以上二〇〇圓一〇四頁)

者 淨土門主 岸 信宏 貌下
淨土大學長 増上寺法主 椎尾辨匡大僧正
知恩院執事長 香月善裕師
淨土宗務長 渡邊眞海師

この本は繪ときをもつて、わが宗祖、法然上人の御生涯と御教旨を、少年少女に、わかりやすく、かつ親しみやすく描き出したものであります。しかも、その内容は、國寶「勅修御傳」によつたものであります。

若い世代の人々のために!!

大正大學教授
竹中信常著

宗教心理の研究

A五判五九〇頁
定價二二〇〇圓一〇四頁
實費

宗教が現代人の心理にどのような受けとられていのかという
ことを、古來の學說史に即して説明すると共に、信仰の心理
靈感の心理、宗教心等をテーマとしてとりあげている。宗教を
理解し、信仰を他に傳へんとする者にとつて必讀の書である。

東京都中央區京橋二の一(鹽山ビル)

發行所

青山書院

振替東京九九三〇三番

東京都品川區上大崎二丁目七八二

取扱

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番

値段改正中 材料値上りの爲お値段は下記の一・二割高です

銀ブランコ2人乗	¥ 13,000
銀ブランコ3人乗	¥ 15,000
銀ブランコ4人乗	¥ 22,000
銀ブランコ6人乗	¥ 26,000
椅子ブランコ4人掛	¥ 13,500
太鼓橋	¥ 10,000
ジャングルジム中型	¥ 28,000
單式滑臺中型	¥ 23,000
複式滑臺中型	¥ 36,500
動物付き遊動木	¥ 30,000

此他各種、一報力タログ選

配達費(都内横濱500圓以内
其他1000圓以内)組立無料。

小田原・熊谷・土浦以遠は丸通
送り、(荷造費當社・送料着拂)

組立説明書送付



幼稚園 運動遊具

全國幼稚園・保育園・小學校・各團體に、良品を廉價にの
ットで、堅牢安全な遊具を納入、好評を頂いております。松
答・光明・芝・明照等の淨土宗幼稚園採用。

篠澤鐵工所

東京都大田區堤方町718
電(75)1024(池上驛東3分)